

Cover Presentation

表紙プレ
ゼンテー
ション

街の風景を立ち上げる「斜面緑地」



犀川河畔を眺める場所に住んでいる。背後は崖になっている。崖には緑が溢れ、川の流れて沿って、緑の帯が走っている。

金沢の街を流れる犀川と浅野川が土地を削り、坂と台地が織り成す地形を作った。この二つの川の外側と間には、崖地に沿って四つの緑の帯が生まれた。こうした緑の崖地を都市景観上「斜面緑地」と呼ぶ。「斜面緑地」は都市美観上、重要な要素と位置づけられる。

都市デザインの名著とうたわれる「都市のイメージ (THE IMAGE OF THE CITY) / 岩波書店刊」がある。一九五九年にMIT教授ケヴィン・リンチによって書かれ、丹下健三／富田玲子によって訳された。二十一世紀の現代においてなお示唆に富む。リンチは「都市は人々にイメージされるものである」とし、

イメージされる可能性を「イメージアビリティ」と名づけて、これを高めることで美しく、楽しく、人間の五感に強く訴える街の姿が作り出せると考えた。本書で抽出された、パス(道)、エッジ(縁)、ディストリクト(地域)、ノード(結節点)、ランドマークというイメージエレメントは都市デザインの手法にもなってきた。

「斜面緑地」は高いレベルの連続性と可視性をもった強いエッジだ。街の豊かな地形を感じさせ、街の風景を立ち上げる。また、それぞれの緑の帯に囲まれたディストリクトの領域性を高める。

リンチは、理想の街の姿をイタリヤ・トスカーナに重ねる。「天然資源と人間の目的との相互の結びつきに十分な注意が払われ、しかもそれぞれの個性はそのままにしておこうとする配慮が払われている場合」を美しい街ととらえた。「斜面緑地」と、金沢の街の関係にも同じことが望

まれる。美しい街の個性を育む。そのために、われわれ市民の「都市のイメージ」の深化こそが望まれるのだろうか。●

松本大
Text by MATSUMOTO Dai
建築家
都市環境マネジメント研究所 研究員
松本大建築設計事務所代表

